マイウェイ my way

伊藤製作所社長

伊藤　澄夫 7

立命館大学に入学

伊勢湾台風が襲来する直前の夏休みのことだ。親父の機嫌の良さそうな時を見計らって、「大学の試験を受けてもええやろか」と、恐る恐る聞いてみた。当然、「ノー」という答えを予想していた。だが、意外な言葉が返ってきた。

「なぜ大学に行きたいのだ」。私は想定外の問いに思わず、「将来会社が大きくなったら、大卒が入社するかもしれない。社長が高卒であれば、社員が惨めに思うかもしれないから」と答えるのがやっとだった。親父は、「試験は1回だけだぞ。浪人は許さん」と言って大学受験を認めてくれた。

思わず「やったー」と思うと同時に、商業高校からの不利な進学に不安を感じた。商業高校では3年生になると、ガリ版で印刷した模擬紙幣や小切手を使っての銀行実務の練習や、簿記会計の資格試験対策として、莫大な量の仕訳作業やソロバンでの計算などの授業ばかりだった。そこで机の下に辞書を隠し、英語の〝内職〟をしたが、すぐ先生にばれてしまう。桑原先生からは「澄夫君、内職ばかりしているが、期末の試験で成績が残せないなら卒業はできないぞ！」と脅された。しかしこれは、進学しない多くの生徒を思っての心遣いに違いないと理解した。直前まで運動クラブで汗を出し、退部後はひたすら〝内職〟していたため、期末試験の結果は予想どおり330人中、273番というさんたんたるありさまだった。

受験英語を1日6時間

立命館大時代の私

貿易科で生徒会副会長をしていた優秀なK君も進学を目指していた。職員室ではK君なら同志社や立命館に受かるだろう…と予想していたらしい。結果的に立命館大学に12人が受験したが、合格したのは私だけだった。後日バスケットボールの後輩から、「伊藤先輩、職員室では当校で270番の成績の生徒が立命館に合格したと威張っていたよ」と言われ複雑な思いがした。

合格した理由を分析すると、英語のウエートが高いと聞いていたため、毎日6時間程度英語に絞って自習をしたことだろう。立命館にはライバル、同志社に英語力で勝つために創設された「Aクラス」があり、入試の英語成績上位者が選ばれていたことを後で聞いた。このころに培った基礎英語が今も海外活動で役立っている。